

Title	炭焼き長者の話：柳田国男と松本信廣
Sub Title	Two studies of the folktale of Sumiyaki Kogoro charcoal burner
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.31(211)- 51(231)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0031">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0031</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 炭焼き長者の話

——柳田國男と松本信廣——

伊藤清司

1

ものごとにはみな歴史があり、盛衰がある。近代の燃料革命以降、炊爨や採暖をもっぱら電気、ガス、石油に頼っている都市生活者はいうに及ばず、農村や山里に暮らす人々の日常からも木炭はほとんど姿を消してしまった。今では木炭は茶の湯炭、コーヒードの焙煎、脱臭、浄水あるいは研磨など、特殊な用途あるいは贅沢な場で使用され、とくに最近はエコロジカルな消耗品として脚光を浴び新たな評価をされつつある。しかし木炭は薪木とともに長い間、日常生活のもつともポピュラーな熱源であつた（柳田國男『火の昔』「木炭時代」『柳田國男全集』第十四巻 筑摩書房）。その頻度も消費量も現今とは較べものにならないほど多かった。

炭焼き長者の話

木炭の消費に長い歴史があり移り変わりがあったから、それを供給する製炭者、いわゆる炭焼きにも当然のことながら興亡、浮沈があつた。たとえば第一次世界大戦時の好景気で木炭の需要に生産が追いつけず、一般家庭では木炭が逼迫した一時期、あるいは半世紀ほど前の朝鮮戦争勃発後の木炭ブームに沸いた当時、木炭に対する関心と評價が一気に昂まり、里に住む人々の中には進んで奥山に分け入つて炭を焼く者も現れた。だが、どちらかといえば炭焼きは昔から「山賊の業」とされ、彼らは貧民の代表のように見られてきた（中村惕斎『人倫訓蒙図彙』）。炭焼きは人里を離れた不便で苛酷な環境の中で重労働を余儀なくされながら、その収入は長い間、他の産業のどの労働収入よりも少なかつた。地域によつて若干の相違はあつたが、わが国の木炭主要産地とされた岩手

県北上山地の炭焼き專業の家では、電燈も無い掘立て小屋に家族が寝起きし、世帯のエンゲル係数も極端に悪く、その収入は当時、貧農地帯といわれた県北山間の農家のそれをも遙かに下まわり、毎日ただ食べて寝るだけの劣悪な暮らしに甘んじていた（『專業製炭の実態調査』一九五七、岩手県）畠山剛氏の『炭焼物語』（一九七一、雄山閣）はその当時の赤貧洗うがごとき炭焼き家族の惨憺たる暮らしぶりを生々しく報じている。

ところで昔話炭焼き長者は改まつていうまでもなく、人里遠く離れた山奥で木炭を焼いて暮らしがない男が思いもしない巨万の富を入れて忽ち大分限者になつたという出世譚である。この譚が日本各地にひろく語り伝えられるようになつたのは一獲千金の夢を語つたいわゆるサクセスストーリーであつたからであろう。そして世にも稀れな幸運を手にした人物が何故、奥山に住む貧しい炭焼きであつたのかといえば、極貧から一躍億万長者へのこの榮華物語の主人公としてはこの「山賊の業」の人物がもつともふさわしかつたということも考えられないことではない。

だが民間説話は—民間説話もというべきだろうが、ただ面白い、興味深いという一点だけで生まれ、そして広

がつたのではもちろんあるまい。弘布するにはそれなりの理由があり、話の表面には現れなくても然るべき歴史的事実の裏づけがあつたために、その虚構譚もそれなりに真実味をおびて人々の間に語り継がれてきたと考えられる。それではその隠れた事実とは一体何かといえば、他でもない木炭にも歴史があり、かつてそれは富の象徴であり、財貨そのものである金銀と密接に関係していたことであろう。つまり山家の賤いたつきの糧とされた木炭がかかつては貴重な金銀の獲得に不可欠とされていた歴史があつたからである。

柳田國男は八十数年も昔、大正九（一九一〇）年から翌年にかけて朝日新聞紙上に「炭焼長者譚」と題する小論を前後7回に亘つて連載し、北の青森津軽から南は沖縄宮古島に至る全国各地の旧記上や口承の炭焼き長者型説話を紹介した。（『柳田國男全集』第二十五巻 筑摩書房刊所収）柳田がこの全国的な民間説話に早くから強い関心を寄せていたことが窺われる。この連載は単なる資料の紹介にとどまらず、行間に柳田自身の鋭い考察と見解とが随所に開陳されていて、すでに柳田民俗学の本領を窺わせるものがある。その中で西遠州（静岡県西部）や加賀金沢（石川県）などの芋掘り長者譚に触れ「大分

県方言類集に依れば、（大分県）宇佐郡などでは炭をイモジと謂ふこと、また「中世冶鑄を業とする者を、一般にイモジと称へたことが、芋掘の長者話を發生せしめた」らしいこと、そして「イモジは鑄物師の略語のやうに」考えられていたらしいとし、

「都近くの炭竈ならば格別、偏鄙な田舎の山で炭を言へば、昔は鉱業か鑄造かの以外の目的は無かつた筈である。百姓は圍炉裏に榾を焚き、竈には藁や柴を燃やすのみで、炭櫃や火桶には縁が無かつた。従つて（中略）昔の人は之（木炭）に由つて金属工業を聯想したに相違ない。之を知つたら金を發見した最も幸運な長者（中略）金壳吉次の父とでも言ふべき人の職業が特に炭焼であつたと云ふ事情は解せられる」（『柳田國男全集』第二十五巻、458～460頁）

と、木炭と金属冶鑄との関係を適切に指摘した。

この鋭い洞察はさらに資料の蓄積と詳細な考証によつて柳田の代表作「炭焼小五郎が事」（一九二五、『海南小説』所収）に結実した。柳田はその中で改めて木炭の非日常的な價値と用途に触れ、これを提供する炭焼き稼業にも歴史があつたことを説き、

「炭焼はなるほど今日（ただし8年前）の眼から、卑

賤な職業とも見えるか知られぬが、」

昔は決してそうではなかつた。

「自分の想像では、豊後の国（大分県）人は今でも炭焼を以つて、微賤にして恥づべき職業と思つて居らぬやうである」（『柳田國男全集』第三巻、343頁）

と述べ、普通の民家で火桶、火鉢に炭火をおこして暖を取るようになつたのは、近世に始まつた煙草を吸う習慣より一層新しい生活様式であつたことを指摘し、そもそも木炭の出現は暖房、炊事とは全然別のところにあり、冶金、鑄金、鍛冶に欠くことの出来ない貴重な熱源として登場したと説いた。そのうえで、石よりも硬い鉱物や一件價値の無い砂を制御して、自在にさまざまな金属器具あるいは金銀の貨幣や細工品を創り出すことは、田畠を耕すことに明け暮れる里の農民たちの考えも及ばぬ特殊な技能であった。等しく金屋と呼ばれた踏鞴師、鑄物師、鍛冶師らとともに山内（たたらを中心とした一連の従業者と家族集団が暮らす一画）に住み、樹木を燃やして、鎔鑄や金打に欠くことのできない木炭を作る炭焼きたちは村里の人々から畏忌の眼ですら見られていた。炭焼きが卑賤な生業のように思われるようになつたのは、天秤棒に商売道具を吊るして町や村を回り、庶民の金属

容器の漏れを修理して歩いた鋳掛け屋同様にのちの時代のことであつた。

炭焼きは、里人から神秘な技倆の持ち主の金屋と同体のように見做されていた。豊後地方で炭焼きをいもじ（鋳物師）と呼んでいたのはその何よりの証である、と

柳田は力説している。そう考えれば、炭焼きが高價な銀を獲て富み栄えたという話はなるほど別に不思議なことではなく、そのまま受け容れることができるかもしれない。だがそれはいつても、厳密に言えば腑に落ちないことが無い訳ではない。そのことを具体的に昔話に即して述べるが、例えば岩倉市郎『沖永良部島昔話』（一九四〇、民間伝承の会）の中の「炭焼長者」

（梗概）我が儘な亭主にホトホト愛想がつき、婚家をとび出した女が、「某所に暮らしている働き者の炭焼き五郎のところへ行け」という神様のお告げにより、彼の荒屋に押掛けて行つて夫婦になる。翌朝、女が夫にいきなり「炭を焼く窯を見たい」と催促し、連れ立つて見て回ると、どの炭窯も黄金で一杯である。それを集めて二人はたちまち長者になつた。（20～24頁）

この奄美の孤島の話には脱落か省略があつたに違いない。なぜ女が唐突に炭焼き窯を見たいとせがんだのか説明不足だからである。いずれにしろ、この物語では宝の山発見の眞の功労者は炭焼きではなく押掛け女房の方であつた。

つぎに南の離島に対し北の奥州山形の山間からもう一例。柳田自身が現地の五十嵐清蔵から見せて貰つた寛延三（一七五〇）年の縁起書を要約して上記の「朝日新聞」紙上に載せた伝説である。

藤太は生國は知らぬが、年久しく（南村山郡）宝沢の山家に住み、炭を焼いて渡世とする者であつた。天仁二（一一〇九）年と云ふ年に、都の藤原氏の女中将姫、清水觀音の夢の御告に由つて遙々と下りたまひ、我身は今日よりは君の妻なり申さるゝ。藤太大に仰天して、朝夕の煙も絶々なる賤が屋に迎え入れると、先是米を求めたまへと一枚の黄金を渡された。藤太は之を持つて市へ行く途で、国分寺の薬師の傍の池に、鴻と云ふ水鳥の多く下りて居るのを見て、件の金を以て礫に打つと、鴻は飛び小判は池に落ち、手を空しくして還つて来た。あれは黄金とて二国一の宝なりと、

姫が惜しみたまふを聞いて藤太、あの光る石ならば我山屋敷で、藁打つ石まで皆それだと、二人で夫から大に拾ひ集め、やがて吉次、吉六、吉内と云ふ三人の子の生れる頃には、もう大変な長者に為つて居た。(『柳田國男全集』二十五巻543頁)

炭焼き藤太を神に祀つた宝沢村の住吉明神に伝わるこ

の近世の縁起では、金銀財物の獲得はどこの農家にもあつた藁の叩き台が端緒であつて、炭焼く窯と直接関係がなく、ここでも宝物発見の第一人者は都からはるばるやつて来た妙齡の女魔であつた。とりあえず例はこれだけにするが、財宝の出たところが肝心のたら場ではなく、炭焼き窯や住居の土間であつたというのは少しお門違いな気がしないでもない。ただしそういう理屈を言い出せば際限が無くなりかねない。そもそも昔話や伝説はおおむねそのようなもので、この程度の曖昧さや不合理性をもつのが珍しくは無いであろうから、ここではこれ以上の詮索はせず、金屋の眷族が幸運にも山ほどの金銀を手に入れて類稀な金満家になつたとして話を続けるが、

この致富譚にはどう考へても平仄が合わないこと、どうしても解かずには話が前へ進まない一点がある。それは

炭焼き長者の話

すでにコメントをしたことであるが、金銀財宝の発見が当の炭焼き本人でもその類族の金屋でもなく、突然他所からやって来て、無理にでもと上がり込んだ女によるものであった。慧眼の柳田國男は当初からこの奇特な女性の存在に注目し続けている。そして彼女と炭焼きとの関係を追いながら、この長者説話の発生を探り出そうとした。

## 2

柳田の眼は何につけこの女性とそして九州北東の豊前、豊後の地に注がれている。北海道を除く日本全土に広がる炭焼き長者譚を仮りに我が民族が事につけて嗜んで来た日本酒に譬えるならば、柳田はその元になつた酵母が、釈迦の『扶桑略記』第三、欽明天皇三十二条に遺されてある伝承に探し出せるのではないかと考えた。それは「八幡大明神顯於筑紫矣」の文に続くつぎの神話(原文は漢文)である。

豊前国宇佐郡廐峯ノ菱瀉ノ池ノ間ニ鍛冶ノ翁有リ。甚ダ奇異ナリ。之ニ因リテ大神おほみわノ比義ハ穀ヲ絶チ三年籠居セリ。即チ御幣ヲ捧リテ祈リ言ス。若シ汝、神ナラ

バ我ガ前ニ顕ル可シ、ト。即チ三歳ノ小兒ニ顕レテ  
 (中略) 云エリ。我ハ是レ日本ノ人皇第十六代譽田天  
 皇 広幡八幡磨ナリ、ト。

この古伝承は『八幡宇佐宮御託宣集』靈卷五にも数条  
 収載されている。みな大同小異の話なので省くが、柳田  
 はその中の大神の比義なる者を靈託を行なう「最初の巫  
 女」の名前であろうと推理した。そして金銀の尊さを教  
 え諭して炭焼き男を天下の分限者として世に顯したこの  
 炭焼き長者譚の中の押掛け女房をその大神の比義に重ね  
 合わせて考えたのである。大分県地方には上掲した山形  
 県南村山郡宝沢の炭焼き藤太伝説のような民間説話が多  
 い。柳田國男が好んで引用した大野郡三重町の真名野長  
 者の話もその一つである。以下は市場直次郎編『豊後伝  
 説集』(一九三一、郷土史蹟伝説研究会刊)の中の「内  
 山の炭焼長者」と題するその梗概である。

京に、醜い容貌のため縁の遠い玉津姫という姫君が  
 いた。三重にいる炭焼き小五郎を尋ねよとの神のお告  
 げを信じ、苦難の長旅の末に小五郎を探し当てた。彼  
 は貧窮を理由に固辞するが、結局は一人は夫婦になつ

た。ある日、姫が持参の小判を渡し、炭焼きに買い物  
 を頼んだ。出かけた小五郎は途中、淵で遊ぶ鴨を見て  
 小判を小石のつもりで擲げつけた。鴨は飛び立ち小判  
 は沈む、で以下嘆く姫に「あんな物なら炭焼く窯にい  
 くらでもある」と言い、こうして炭焼き夫婦は金山の  
 持ち主になり、真名野長者と讃えられた。(82~83頁)

このあと話が続くがとにかく異工同曲の炭焼き長者譚  
 である。この豊後(大分県)三重町の話に出てくる女  
 性・玉津姫は各地の同型説話では玉依姫あるいは玉世姫  
 などとして登場しているが、それらの玉は靈を意味して  
 おり、彼女たちは等しく神靈の憑依する女、巫女、つまり  
 神の妻を意味すると柳田は考えた。そのうえで玉津姫  
 はまさしく『扶桑略記』や『託宣集』にいう比義に相等  
 しているとし、鍛冶の翁の姿をもつて顯現した宇佐の神  
 を齋<sup>い</sup>き祀り、その靈験を灼然にする神話上の比義の存在  
 は、炭焼きの嫁になつて夫を黄金の所在へと教え導き、  
 彼を真名野長者として世に識らしめた説話上の玉津姫に  
 そのまま投影されていると柳田は見たのである。さらに  
 柳田は、肥後(熊本県)菊池の長者の名が薦<sup>こも</sup>編みの孫三  
 郎であるとか、この型の長者譚には炭焼きが藁を打つて

薦を編んだという話があり、實際にも炭焼きや鑄物師ら

が製品を薦で荷造りすることなどを掲げて、

「宇佐神宮の以前の御正体<sup>みしゃうたい</sup>が、黄金であつたと謂ひ、

薦を以て之を包んだと謂ふ神秘な古伝」（『柳田國男全

集』第三卷、360頁）

の末裔が、真名野長者など一連の炭焼き長者譚であつた

のではないか、「此ばかりの材料から推測するのは大膽ではあるが」と資料の貧弱さを自ら認めながらもそう述べている。そして紙面を換え行を改めて、

「炭焼小五郎の物語の起源が（中略）宇佐の最も古い神話（以前のご神体が薦に包まれた黄金であつたという古伝）であった」（右同、365頁）

のではないか、と説き

「炭焼長者は豊後に生れ、後に全国に旅をして多くの田舎に、假の遺跡を留めて置いてくれなかつたなら」

（右同、366頁）

後世の八幡神社の隆昌の理由が説明つかないと言い、八幡信仰の盛況を炭焼き長者説話との間に因果関係があつたのではないか、とも述べている。

兎に角柳田は、炭焼き長者説話は宇佐八幡神の神話ないしそれに近い古传承から醸醉し弘布したと想定した。

そのうえで、この出世物語は

「豊後に起つたことは疑ひ無い」（右同、343頁）

と、柳田としては珍しく断定的な言辞を吐き、この話を炭焼きないしその類縁の金屋たちが、稼業がてら諸国を渡り歩いて日本各地に弘めたのであろう、と繰り返し説いた。

神靈は最も清くかつ賢い女性を選んで靈験を顯わし、さらにその胎内に御子を宿らせ給うというわが国古来の神道の信条に遡つて当該説話の発生を説こうとする柳田の「炭焼小五郎が事」は、炭焼き長者譚の最初の本格的な考証であり、柳田民俗学の代表作であった。この著作は何よりも日本固有の思想信仰に深く根ざした主張であるだけに多くの感銘と賛意をもつて受け容れられ、この説話の発生と伝播に関する柳田の考えは恰も定説のように見做されて、多くの学術論文に引用され、関連する事典類にも紹介されてきた。

半ば古典のようになった「炭焼小五郎が事」は率直にいつてやや晦渋な作品である。それはこの論文に限つたことではないが、柳田一流の博引旁証と独自の流暢な筆致にもよるが、一部の明快な断言とは裏腹に、推測による言辞、心細いほど慎重な発言、あるいは裏付けの無い

自由な連想が行間に夾雜しているからである。「炭焼小五郎が事」の本質的な問題点については稿を改めて考究するとして、以下にその一、二をとりあげる。

柳田はたたらという地名が各地の沼沢のそばや川、淵の岸に多くのこされているのは、かつて踏鞴師（たななし）が水辺に臨時の作業場を設営して稼動したことのあらわれである、と説いた。そしてそのあとに、金銀に圍まれて暮らしていながら、その何たるかを知らない炭焼きが大分限者になる端緒が押掛け女房から渡された小判を礫代わりに水鳥に無益に擲け打つことにあると述べている。これは恰も水鳥の浮く水際にたたらが建ち、そこで金銀などの冶鑄が営まれ、結果的には水鳥に誘われた炭焼きが手にする財宝はそのたたら場であつたかの連想を読者に抱かせかねない。しかし、これらのことは現行の炭焼き長者説話そのものによつて実証されるようなことでは決して無い。

柳田はまた同じ論著の別の紙面でつぎのように言つてゐる。

「津輕（青森）最上（山形）其他の炭焼藤太が、遠く西海（九州）の浜から巡歴して来たことは、最初より之を疑ふことを得なかつたが、然らば何人が何様の意

趣に基いて、此話を運搬してあるいたかに就いては、解答は今以て容易で無い。自分が試に揚げた一箇の推定は、所謂金賣吉次を以て祖師と為し、理想的人物と仰いで居た一派の団体、即ち金属の賣買を渡世とした旅行者の群に、特に歌詞に巧なりと云ふ長處があつて、之に由つて若干の生計の便宜を、計つて居たのでは無いかと云ふに在つたが、現在の資料は必ずしも之を助けるのみで無い上に、全体に亘つて世上の忘却が甚だしく、年代の雲霧は頗る我々の回顧を遮るものがある。尚辛抱強い後の人々の研究に、委付するの他は無いのである」（右同、353～354頁）

一步も二歩も腰を引いて慎重に構える柳田はさらに紙面を換えてこうも述懐している。

「金屋が神と其旧伝とを奉じて、久しく漂泊して居た種族であるとしても、彼等と宇佐の大神との因縁は、此だけではまだ見出されないのである。又眞野長者を中心とした連環の物語が、其の不文の記録（つまり宇佐神宮の古傳承）から出たと云ふことも單に一箇の推測であつて、炭焼の一条が果して最初より是と不可分のものであつたか否かには疑がある。自分はたゞ此ほど奇抜にして且つ複雑な話が、此ほどの類似を以て

(日本) 各地に偶発することは無いと信じ、何人か々運搬してあるいたとすれば、それは炭焼の業と最も親

しかつた者が、古く信仰と共に或地方から持つて出たので、之を豊後とすれば比較的鍔目が合ふやうに思ふだけである。但しまだ／＼解きにくい難題がいくつもある。(右同、359頁)

以上の文を見る限り、種々氷解し難いことが少なくなつたが、炭焼きの類族が豊後のあたりから持ち歩いて伝えたと仮定すれば、日本各地に分布するこの型の有りようが一応おさまりがつくのではないかという作業仮説を述べたまでであつて、柳田のあれこれ思案し続ける跡が読みとれる。しかも自ら掲げたその仮説を不動のものとは思はず、些か不安を抱きながら模索し続けている気配すら感じられる。それを柳田の高名に誘われてか、あとは後人の研究に托すという彼の言葉に鼓舞されてか、その仮説・言及した思いつきをそのまま既成事実であるやに合点し信奉してその補強に努め、あるいはその先を論じる研究者が少なくなかった。炭焼き長者譚研究の停滞の真の原因是案外このあたりにあつたのではないか、と私は考えている。

### 3

炭焼き長者型説話についての柳田の提示は長い間もしたる疑念の無いもののように受け容れられてきたが、その間、小さな波紋が生じた。一石を投じたのは松本信廣である。松本は大学を卒えた年の夏、のちに『雪国』に結実する柳田の東北・三陸海岸の旅(大正九、一九二〇)にお伴をして以来、柳田を終生の師表としてきた。その松本がのちパリに留学し、フランスシナ学者らの警咳に接したが、帰国後、当時のフランス東洋学界の泰斗アンリ・マスペロの要請をうけて、評判高い柳田の「炭焼小五郎が事」の梗概を日佛会館刊行の学術雑誌に紹介した("LA LÉGENDE DE KOGORÔ LE CHARBONNIER < D'APRÈS UN ARTICLE DE M.K. YANAGIDA>")  
Extrait du Bulletin de la Maison Franco-Japonaise, tome II, no 3-4. Tokyo. 1930.) これに前後して松本は、南方熊楠や村松武雄らが頻繁に寄稿していた民俗学会編『民俗学』の第一巻六号(一九三〇)に「芋掘長者の話」と題する一文を発表した。11000字に満たない短篇であるが、これが問題の一石である。すでに述べたように、柳田は炭焼き以外の仕事、つまり芋掘りを稼業にする男を

主人公にする炭焼き長者型説話の存在に着目し、芋掘りとは実は<sup>いもじ</sup>鑄物師のことであり、金屋仲間であつた証しであるとして自説の有力な根據にした。なるほどいもじのじが脱落ないし省略されて、鑄物師が芋になり変わるこ<sup>ト</sup>はあり得ないことでは無い。日本語には語彙の末尾が消落する例は他にもある。名詞・感嘆詞の南無三宝がナムサンになり、地名の上<sup>かみ</sup>つ毛野<sup>けぬ</sup>、下<sup>しも</sup>つ毛野<sup>けぬ</sup>がコウヅケ、シモツケといわれ、あるいは岩手県南の沿岸地方の正月民俗、脛皮<sup>すねかわ</sup>剥<sup>だく</sup>りがスネカと呼ばれるなど、類例は少な<sup>く</sup>ない。こうしていもじが言語疾病をおこして芋になると、芋なら掘るとか食べるという言葉が容易に口をついで出てくるから、鑄物師が芋掘りに職業換えする可能性が無いとはいえないであろう。しかし柳田のエティモロジーには時に素直に追従しかねことがある。たとえば農作物の害虫を駆除する呪術的習俗であるサネモリ送りについての語源説もそれである。柳田は、田植え終了後、田の神つまりサの神を祀つて天にお帰りを願う農村神事のサノボリないしサナブリがサネモリに転訛したと説き、ここでもさまざまな旁証を並べ立てている（「毛坊主考」『柳田全集』第十一卷所収）が、必ずしも実証を経た定見であるとは考えられない（拙著『サネモリ起

源考」——日中比較民俗誌』二〇〇一、青土社）さて松本信廣は「芋掘長者の話」でつぎの一然著『三国遺事』卷一 百濟武王の条の薯童伝説をとりあげた。

(梗概) 第三十代武王は、母が龍と交わつて生まれた子で、幼少より器量が人にすぐれていた。彼は薯蕷(山芋)を掘つて商うことを稼業にしていたので薯童と呼ばれた。新羅の眞平王の三女・善化公主が評判の美人だと聞いた彼は、薯を振る舞つて巷の子どもを買収し、「善化公主が薯童ト私通セリ」という童謡を創つて都中にはやらせた。噂が禁中に達し、公主は遠国竄流の身となつた。訣れしなに母后が公主に純金一斗を贈つた。薯童は公主を道中に待ち伏せし、二人は童謡の文句とおりに夫婦になつた。百濟の地に到り、公主は母のくれた黄金をとり出し、生計に充てようとすると、薯童は大いに笑い、これが尊い物ならばわしが薯を掘る山に沢山捨ててあると言う。こうして二人は巨萬の富を獲て（中略）やがて人心を收攬して王位に即いた。（原文は漢文）

松本はこれを紹介したあと、柳田が「炭焼小五郎が

事」で掲げたわが国の芋掘り長者の例話に言及し、「姫がおしかけて嫁にやつてくるかわりに、童子（薯童）が詭計を用いて、姫の婿となる。ここに他の説話との融合の結果生じたらしい変形があるが、妻たる女子の力で童子の本来有する徳分が顯在するところは両者同様である。

芋掘長者の物語は、必ずしも<sup>いもじ</sup>鑄物師という語から来たのではなく、もっと他の由来があつたらしい」（『日本民族文化の起源』第3巻、309頁）

と説いて、同じ『三国遺事』卷二に載る甄萱の大蚯蚓<sup>みみず</sup>退治説話が日本の三輪山神話とよく似ていることなどを併行事例としたうえで、八幡宮系統の古い伝説が朝鮮半島の伝承と深い脈絡があるようでもあるから、

「柳田氏の推測のことく、宇佐八幡宮の古信仰が、金属工芸の徒と関係が深いとすれば、こういう神話伝説（三輪山神話や芋掘り長者譚）もあるいは大陸の方から渡つて来た工芸とともに、日本に流入したと考えられぬこともない」（『前掲書』第3巻、310頁）  
と述べて、柳田とは異なる視点から新しい注目すべき提案を試みた。

しかし折角の貴重な問題提起ながら、松本はその後久

しくこの課題に積極的に関わることは無かつた。これには然るべき事由があつたらしい。以下は別の機会に一度文字にしたことであるが、後日、多分講義中に、松本が「炭焼小五郎が事」に言及した折、問題の「芋掘長者の話」について「柳田先生からお小言を頂戴した」と洩らした。ただし叱られたと言つても、そう述懐した時、松本は些<sup>まことに</sup>か相好を崩す態で、悪戯小僧がばつの悪い時によくするような仕草であつたから、柳田の注意は叱責というような激しいものではなかつたと私は思った（拙稿「松本先生と芋掘長者の話」松本信廣『日本民族文化の起源』第3巻の月報、一九七八、講談社、5~8頁）。

しかし必ずしもそうではなかつたかもしだれ。というのは松本はその後、「柳田國男の『海南小記』と『海上の道』——民族と民俗について——」（『季刊どるめん』第十三号、一九七七、JICC（ジック）出版局）の「炭焼小五郎の比較研究で怒りをかう」という小見出しお文の中で

「これ（わが国の芋掘り長者説話が大陸と関係があると書いたこと）が、先生のたいへんご不興を買つてしまつた」（104頁、前掲『日本民族文化の起源』第3

と書いているからで、その小言が結構厳しく、骨身に沁みたのかもしれない。

柳田の松本批判の内実は兎に角として、当時わが国の民俗学は民族学とともに草創期に在り、両学問が互いに共存し補完し合う仲というよりは、不幸にして双方がミンヅクガクと称していたこともあって、一部の研究者の間には対抗意識をむき出しにし、ときに排他的に走り、かげに回って相手を貶すような雰囲気があつたらしい。

柳田の松本に向けた注意が厳しいものであつたとすれば、日本民俗学界の総帥をもつて任じる彼の「一国民俗学」を堅持しようとする立場からの発言であつたに相違ない。

しかし松本の芋掘り長者譚についての考え方そのものはその後も変わることが無かつた。一九七一年、問題の「芋掘長者の話」を再録し、自ら編輯した『論集日本文化の起源<sup>3</sup> 民族学Ⅰ』(平凡社)の解説(註1)で炭焼長者譚に触れ、

「炭焼五郎型の説話は日本以外にも流布しており、これと比較することによつて日本のものが解明される場合がある」(20頁)

として、かつて「芋掘長者の話」に引用した『三国遺事』の武王の条の薯童伝説などを再び掲げて、

「(この説話の)主人公は必ずしも炭焼に限らず、單なる賤業であればよいのであり、わが国の芋掘藤五郎の芋も鑄物師という名称から由來したわけではなく、最初から芋掘を業としたのである」(20頁)  
と述べている。(註2)

(註1) この解説はのち「日本神話研究の進み」と題し、松本の自選論文集『日本民族文化の起源<sup>1</sup> 神話・伝説』(一九七八、講談社、50~124頁)に再録した。以下では「日本神話研究の進み」として引用する。

(註2) 松本の論文に触発されて、私は日本および朝鮮半島の炭焼長者型説話と芋掘り長者説話のそれとの関係を論じた「日朝芋掘長者の比較——成立に関する一考察」と題する小論文を閑敬吾その他編『日本昔話大成12研究篇』(一九七九、角川書店、20~34頁)に発表し、のちこれに若干の補筆・訂正を加えて自著『昔話 伝説の系譜——東アジアの比較説話学』(一九九一、第一書房、207~225頁)に再録した。

「芋掘長者の話」を発表してから1／4世紀ほど経つた一九五六年、松本は再び炭焼き長者譚を問題にした。とりあげたのは書き下しの著書『日本の神話』（至文堂）の中である。これは比較神話学的手法のほかに、日本各地の習俗や伝説などの中に沈殿凝結しててている神話的要素を有効にとり込んで記紀神話の再解釈を試み、日本古代文化の成立を明らかにしようとした名著であるが、その第五章「国の誕生」の1「鑄造技術」の項に炭焼き長者型の新しい資料を紹介した。それは前回提示した朝鮮半島の薯童伝説に優るとも劣らない貴重な資料で、ある意味ではわが国の炭焼き長者説話研究のその後の方向を決定づけるものであった。

松本は『神道記』卷八の「釜神事」や『琉球神道記』卷八の「火神事」によく似た説話が「南シナで採集」された苗族の民間伝承に認められるとして「灶神故事（甲）」「同（乙）」などを紹介している。まず「灶神故事（甲）」

（梗概）富豪の娘に結婚話があるが、父親は婿の候補

炭焼き長者の話

者の貧乏を理由に承諾しない。娘は富貴は本来その人に備わっていると称して、三百両の銀子と馬を貰い、それに乗つて家を出て歩むに任せて行くと、馬はやがて小さな萱葺き家の前で停つた。娘はそこの老婦のもてなしを受け、息子がいるが今は炭を焼きに出かけて留守だと言われ、無理にも嫁にして欲しいと頼み、貧乏だからと辞わられているところに当の息子が戻つて來た。今晚食べる飯が無いと聞いて、娘は彼に一枚の銀子を渡し、米を買いに送り出しが、彼は米屋の前で数匹の犬に咬みつかれそうになり、銀子を礫代わりに投げつけ、手ぶらで戻つて來た。それをなじる娘に炭焼きはあれがそういう宝物なら、俺が炭焼くところにいくらであると感じた。翌朝、炭焼き窯に行つて見ると、なるほど銀子が山のようにあつた。二人は屋敷を建て田畠を買つて長者になり、乞食施餓鬼を行なつた。

他方、娘の父親は落魄して物乞いをして歩き、たまたま布施をするお大盡がいるという噂を耳にしてその屋敷を訪ねたが、いつも運が悪く食べ物にありつけない。屋敷の奥方がそれを知り憫んでもてなすと、その老乞食がほかならぬ自分を追い出した父親だとわかり、内に銀子を隠した餅を籠一杯にして与えた。ところが

餅の嫌いな父親はそうとは知らずに米の飯と交換してしまう。再び物乞いに屋敷に現れて来た老乞食は、餅

の中の銀子のことを訊ねられ、己の運の悪さを恥じ、竈の焚き口に入つて焼け死んで灶王菩薩つまり竈の神になつた。

### つぎは「灶神故事（乙）」

（梗概）某村に兄弟がいた。弟は貧乏の相だから金持になる運勢の持ち主を妻に迎えようと占師に言われ、貧しい家の娘だが福運のある女を嫁にした。やがて児ができる、出生祝いの時、嫁の実家が貧乏なため、里からの祝いの品が兄の児の祝品に較べてあまりに貧弱だったので嫌や気がさし、馬一匹と銀子を与えて妻を離縁した。女が馬の行くにまかせ、山中の柴刈りの粗末な家に辿り着き、無理を言って泊めて貰い、その柴刈りの女房になつた。彼女は持参の銀子一枚を柴刈りに渡し、米を買いにやつたが、柴刈りは米屋の前で犬に吠えられ、銀子を犬に投げつけて戻つてきた。呆れた女房は犬脅し棒と銀子を持たせて再び米を購いにやつた。袋一杯の米を手に入れ、はじめて銀子の値打ちを知つた柴刈りは、あんな物なら俺の家の近くになんぼでも

あると女房に語つた。

以下は前掲の「灶神故事（甲）」と同様の展開で、元の亭主は離縁した妻の嫁ぎ先に物乞いに現れ、己の運の無れにつくづく愛想がつき、竈の内にはいり込んで焼け死に、竈王菩薩になつた。

松本は南シナでの採集資料として紹介しているが、じつは華南ではなく華中の伝承で、正確には今日の湖南省湘西土家族苗族自治州鳳凰県に住む苗族の吳文祥が口述し、それを凌純声・芮逸夫が採録した話である（凌・芮『湘西苗族調査報告』一九四七、国立中央研究院歴史語言研究所、257～265頁）。言うまでもなく前者（甲）はわが国でいう炭焼き長者初婚型、後者（乙）は同じく再婚型の説話で、ともに日本のものとそつくりの話であり、敢えて記述するまでも無いほどの内容だが、抽象的に似ているというだけでは済まされないので一応要旨を掲げた。松本は以上の二話のほかにもう一話を W. Eberhard の“Chinese Festivals”（1952, N. Y. Henry Schuman, P. 22～23）から引いている。これはまさしく南シナの広東省伝流とされる竈神由来故事である。ただし詳しい内容も出所も明示されていないので省略する。

松本はやむにやう一度、炭焼き長者譚をとりあげている。『日本の神話』を書きあげた十一一年後の一九七一年の秋、柳田國男没後十年を記念した第一十二回日本民俗学年会（於慶應義塾大学）の公開講演「大陸と日本」（同じ題名で日本民俗学会『日本民俗学』83号、一九七二、1～14頁に収載）の中である。そのときに新しい資料、中国雲南省大理白族自治州の白族（チベット・ビルマ語族系）の伝説「轆角莊」を追加紹介した。これは雲南地方の近世史料『南詔野史』や『滇繫』などにも収録されている白族の代表的な民間伝承である。この説話については別の機会にくわしく論及するとしているが、内容は炭焼き長者初婚型そのものである。ただしその時の講演ではこの資料の存在することに簡単に言及しただけで、わが国の炭焼き長者譚との関係については具体的に触れず、そこでの見解は十数年前の『日本の神話』のそれと変わっていない。

松本の提示した海外の事例はいずれもわが国の炭焼き長者型説話の研究上無視できない資料であることは誰の目にも明らかであるが、物事に万事慎重な松本は短絡的に結論を急ぐことはなく、もちろんそこでは柳田説に直接逆らつよくな仮説に奔ることはなかつた。いうまでも

なくそれは過去の此画の記憶と無縁ではなかつたかもしないが、じつは松本のこの説話に托した関心の所在は発生やその系統とは別のところにあつた。松本は本質的には民俗学者ではなく民族学者であり、その学問のスタンスは東南アジアと日本の古代に在つた。炭焼き長者の類型として朝鮮、中国の説話のほかにサルウイン川流域のミヤンマー領に住むパラウン族の「<sup>ヒナ</sup>蟻王子物語」を紹介している。これはEtudes Asiatiques Vol.xx.Tome Second (1925) に掲載の J. Przyluski "La princes à l'odeur de Poisson et la Nāgī." (p.269) が Leslie Milne "An elementary Palaung Grammar" から引いた説話である。此か長いかつ多岐に亘る話があるので以下に要約する。

に変身した。ホイは女鬼の衣服を盗み、それを着てその国からひそかに逃げ出そうとしたが、それを知った女鬼に追われ、ようやくのことでのチャンパナーゴという国に到つた。折から国王が王女の婚選びの最中で、

高い塔の上から頭巾を投げ落とし、それが当たつた者を婿にすると宣言した。そして王女が抛つた頭巾がホイの頭上に落ちた。群衆はホイが変な臭いのする衣服を纏つているので大いに嘲笑した。国王もそれを嫌い、王女をホイに与えて王宮から追放した。王后は嘆き悲しみ、訣れに際し、王女に宝石を与えた。二人は山中の谷間に住むことになり、王女が贈られた宝石の一つをホイに渡して食べ物を需めてくるように言うと、彼はこんな物が宝なら、この辺りにいくらでもあると言ひ、二人は沢山の宝石類を拾い集めて忽ち大富豪になりました。壯麗な御殿を建てた。そのうえホイが女鬼の衣服を脱ぐと嫌やな臭いも無くなつて立派な若者に変身し、舅の国王と和解して国土の半分を譲りうけて豊かに暮らした。(p.269~270)

方舟漂流その他、さまざまモチーフから成る複合説話であるが、後半の父親による娘の追放、母の贈り物、

娘がそれを夫に渡して買物させたのが動機で宝の山を発見云々という致富譚は確かに炭焼き長者型説話と無関係ではない。

松本は「芋掘長者の話」でとりあげた『三国遺事』の薯童伝説とこのパラウン族の「蟻王子物語」とを比較し、後半の構成と趣意がよく似ているばかりでなく、百濟の武王に出世する薯童は母親が池の龍と通じて生まれた龍の児であるのに対し、パラウンの物語の主人公が蟻の子であつて、ともにその出自が水界に關係が深い点に注目した。そのうえで、人間の福分の有無についても語つてゐるこの型の説話には、福運の備わつた者が水界と縁故があるという觀念が認められること、それは富の根元が水の世界に由来するというわが国の龍宮童子の説話にも認められるように、日本古来の信仰に通じてることを指摘した。

松本の関心はそれに留まらず、より民族学的な問題に注がれている。一連の炭焼き長者型説話で、金銀や宝石の発見として具体的、即物的に表出されている福運、富貴の顯現はもっぱら女性の存在に負うものである。しかもその女性が、押掛け女房という言葉に端的に表現されているように、結婚において能動的役割を演じているこ

とを強調し、

「女性が自ら配偶者を選ぶのは女性が社会的に優越性を持つておる文化地帯の特色であつて（そのような伝統社会は）東南アジアに多い」（『日本の神話』160頁）

と述べ、行を改めて更に

「炭焼き長者譚で神の告といつておしがけ女房の来る形式は、パラウンの話に見える婚選びの原始的型から発展して来たものではなかろうか？して見ると大陸の太平洋沿岸から我国にかけて分布する炭焼き長者譚は、母権思想の色濃い東南アジアと密接な関係があるのでないかと云うことが考えられる」（160頁）

として、かねてより关心を寄せておる日本民族文化と東南アジア文化との関係に及んでいる。

炭焼き長者型説話をめぐる松本の視線が東南アジアに向けられているにはもう一つ別の訳があつた。今から七十余年前、俵国一が、砂鉄を冶鎔して鉄製品を鋳造し、鍛造するわが国古来のたら技法は華南の福建地方や東南アジアの治鑄技術と類似していると指摘（『古來の砂鉄製鍊法』一九三三、俵国一編輯・発行、132～142頁）したことに注目していたからであり、更にかつて啓發を蒙ったフランスのシノロジスト・アンリ・マスペロ（Mas-

pero, Henri）の「民間説話の研究は技術と関連させて実証的に進めるべきだ」という考え方（「柳田國男の『海南小記』と『海上の道』」「季刊どるめん』13、103頁）に刺激をうけていたからである。

松本はたたらという地名が朝鮮半島にもあり、またかつて倭人が朝鮮半島に赴いて鉄を需めたと『魏志』に誌されているなど、金属作製の技術その他の多くの技術文化が半島を経てわが国土に将来されたことはもちろん無視できない事実であるとしながら、

「わが国への金属器製作技術の伝来経路は一つとはかぎらず（中略）呉の眞鋤まさびとして華中より優秀な武器を輸入した経歴のあるわが国人が、古くから江南方面と（金属文化でも）交流をもつていたこと」（『日本神話研究の進み』松本編『論集 日本文化の起源3—民族学1』47頁）

が考えられると主張している。

わが国古来の砂鉄製鍊法、たら文化についての俵の仮説が、現在の製鉄技術史研究の分野でどのように評價されているのか、遺憾ながら門外漢の私にはわからないが、民間説話の中には興味深さや面白さゆえに伝播し移動するものも当然あつたであろうが、物、技術、儀礼な

どの伝播に伴つて移動する由来说話もまた当然あつた筈である。したがつて炭焼き長者型説話が、柳田國男が説くように、金属工芸集団が語り伝え、かつ彼ら金屋たちがこれを日本各地に持ち歩いてひろめ、しかもこの話のそもそもその酵母が彼らが信奉するご神体、つまり薦に包まれた黄金であつたとするならば、当然金属文化の来源、

その伝来を度外視しては、この話の発生も本質も論じ盡くすることはできないだろう。そのような観点から松本は海外に類型説話の存在することを示すことによつて、この研究は「一国民俗学」の枠内では收まりきれないことを明らかにしたのであつた。

松本は柳田のそれまでの研究法について、

「このやりかたは、ちようどこれより少し先だつてわが国において伝説研究に大きな貢献をした南方熊楠の方法と逆になつておる。南方は得意の博引旁証により伝説の世界的分布を探り、とりわけ、インド、中国の文献にその類例を求め、わが国の説話をこれにかづけて説明しようとする。

説話の世界流布は、ひろく容認された学説で、こと印度起源説は、一時ヨーロッパ学界を風靡した。今日ではインドのようある（特定の）地点に起源を

求める考え方は廃れたが、（中略）説話がごく古い時代に広大な地域にわたつて移動したことを否定することはできぬ」（「日本神話研究の進み」『前掲書』72（73頁））  
と述べ、そのあと、斯学の先達としての柳田の学問に及び

わが国の事物をむやみに中国やインド伝来に帰する、当時の学者の通弊に反撥するのあまり、柳田は説話・伝説をまず本土（日本国内）自生として説明することを強調し、これを矯めんとしたのである（前同、73頁）

と述べて、柳田の依怙地ともとられかねない「一国民俗学」的研究法を日本民俗学草創期の所産として、自戒をも含めて歴史的に位置づけている。

松本のこうした柳田民俗学に対する理解は誤謬でも阿諛でもなかつた。夙に海外の専門書にも眼を通していた柳田が外国との比較研究を頭から無視も拒否もしていたのではもちろん無かつた。たとえば一九三九年に出版された『アジア問題講座』（創元社刊・全十二巻）第一巻の巻頭言「アジアに寄せる言葉」に、わが国の代表的な昔話「カチカチ山」や「猿蟹合戦」が東アジアや東南ア

ジアにも伝承されていることを指摘し、

「記録の伝へぬ文化の交流がはるか昔の世に行なはれてゐたことだけは推察がつく。そしてこれをたぐつて行けば、まだその筋道を確かめて見るだけの途は残されてゐた」

といい、さらに、

「支那は驚くほど豊富な昔話の貯蔵地であるが、往来の久しく親しいものがあつたにもかかはらず、われわれは西洋人に先鞭をつけさせて傍観して來た。しかもあの四角い字だけは、（西欧人に較べ、日本人の方）が）はるかに容易に読み得たのである。獨り支那とは言はず、常民の心の最も奥にひそむものを、これ（昔話）によつて突合せて見るといふことは、五族協和の理想のためにも、必要な仕事であつた筈だ。東亞の新しい秩序の礎石も、案外かやうな處にあつたかも知れないのである」

満州国建設のスローガンである五族協和云々は当時の日本の国策と無関係ではないが、それはそれとして、比較研究の必要性と国際的意義とを柳田はすでに指摘していた。（註3）

松本の柳田民俗学に対する眼差しが妥当適切であつた

ことは、敗戦後、柳田学の動向に闡明に認められるようになった。柳田没後十五年目の一九七七年、松本は朝日新聞社カルチャーセンター主催の講座「柳田國男の人と学問」で左記のように述べている。因みにこのときの講演は上掲した「柳田國男の『海南小記』と『海上の道』—民族と民俗について」として『季刊どるめん』13の誌上を飾つてゐる。

「今度の戦争（世界第二次大戦）を境として（柳田）先生に「一国民俗学」という立場を固執せず、他の民族のことも研究し、そして問題を解決していくこととする傾向が強調されてきている」（前掲『日本民族文化の起源』1神話・伝説』342頁）

柳田の比較民俗学研究は残念ながらその死によつて十分な展開も具体的な开花も無しに終わつた。だが柳田によつて斧鉄の入れられた炭焼き長者譚の研究は松本の登場によつて開拓の転機を迎えることになつた。しかし国際的な比較研究の鋤や鍬が入れられたといつても荒漠とした原野が未墾のまま拡がつてゐる。「大陸の太平洋沿岸から我国にかけて分布する炭焼長者譚」といつても、具体的に列举された類話はわが国のものを除いては十三世紀の朝鮮の記録「薯童伝説」と中国の湖南省苗族およ

び雲南省白族の現行民間故事などわずかの数に限られ、しかも中国大陸の圧倒的な主幹民族である漢族の類話は全く挙げられていない。このように資料はごく限られかつ偏在し、広大な東アジア、その太平洋沿岸のひろがりに較べれば、比較研究とはいってもあまりにも寥々たる数であるといわざるを得ない。

問題はほかにいくつもある。松本は、基本的にはこの型の説話がたら師、鑄物師ら金屋たちと深い関係にあるとする柳田説に立脚しながら、この話の主人公は必ずしも炭焼きとは限らず、芋掘りでも柴刈りでも賤業者であれば構わないとも述べている。しかしこの発言は、本来炭焼きやその眷族を主人公とするこの話が伝承の過程でもろもろの賤業に携わる貧しい男に変化したもので、主人公の職種替えはこの型の説話の核心に関わる事ではないようにも読みとれる。しかし始めからそう決めてかかつていいのかどうか。靈妙な女性のおかげを蒙つて一朝にして富貴を掌中にした幸運なこの長者譚の主人公は果して炭焼きやその類縁でなければならなかつたのか。これまでわが国では当然のことのように思われてきたこの物語のヒーローの素性も改めて考えてみなければならないようと思われる。そしてこの点にも関連する問題で

あるが、日本では炭焼き長者譚はヒロインとその恩沢を蒙る男との結婚の在りようの相違に依り初婚型と再婚型に分類されていて、前者の結婚相手の稼業がしがない炭焼きとするのが、わが国では圧倒的に多いのは事実だが、後者の初婚相手となると断然富裕者ないしはその家の御曹司とする話が圧倒的に多い。そして物語の冒頭に「産神問答・男女の福分」、私のいう「青竹一本と塩一俵」を伴うのはもっぱらこの再婚型の方である。（拙稿「炭焼き長者の話 青竹一本と塩一俵」「同（続）」「同（続々）」『中國民話の会通信』69号、70号、71号）ここで生じる課題は当然炭焼長者譚と産神問答譚の関係である。炭焼き長者説に産神問答が付着した複合型が炭焼き長者再婚型であるとすれば、初婚型と再婚型の成立の先後関係は自ら明らかである。しかしおが国では再婚型の二度目の夫を炭焼きとする話も無い訳ではないが、再婚相手がはじめから金持ちとする話も相当数あり、また酒泉を発見して富裕になる説話が黄金発見のそれに劣らず多く（大島建彦『日本の昔話と伝説』の中の「昔話運定め資料一覧 A男女の福分」の項。二〇〇四、三弥井書店、237～247頁）必ずしも初婚型と同じとはいえない。しないように思われる。そしてこの点にも関連する問題でかも物語の焦点は再婚した夫婦のハッピーエンドそのこ

とよりも寧ろ働き者の女房を追い出した前の亭主の零落に移り、やがて竈神の縁起に終わる話が多い。したがつて炭焼き長者の再婚型は初婚型の変化、発展した話なのか、それとも本来、別の話であるのか、つまり両型は本来、入れ籠の関係にあるのか無いのか。この点もわが国では話題にされるゝもなく不問に付されたままであった。

幸いにして近年、日本の隣接諸国でも民間説話の採録と研究が盛んになつた。中国大陸においては前世紀の五十年代以降、とくに近来二十年の間に、全国規模の組織的な調査蒐集が進み、これまで陽の射さないまま推移してきた漢族及び「少数民族」の暗々たる「昔話の貯蔵地」に俄かに光が注がれて浩瀚な民間故事集が公にされました。それらの中には、炭焼き長者説話の比較研究上、看過できない資料が数多く含まれている。

柳田がはじめて踏み入り、そして松本が径をつけた炭焼き長者譚研究は、ここに至つてようやく本格的な比較を視野に入れた新しい段階に立ち入ることになつた。

(註3) エーバーハルト (Wolfram Eberhard) が一九一七年に “Typen chinesischer Volksmärchen” (『中國語のタイプ』) Helsinki. FFC 120 を刊行し、同時に “Chinese Fairy Tales and Folk Tales” を編訳 (英文) して刊行しているが、柳田は夙にこれらを入手していた。

(ハ) の項 完